

紀南教会瓦版

主のよき力に

守られて

主のよき力に守られて、夫婦揃って元気に還暦を迎え、まもなく結婚三〇周年を迎えようとしています。背中が羽が生えて、いつでも、どこへでも飛んで行

つてしまふと思われていた娘時代から、こうして一カ所に落ち着いて、自分の家庭を築くことなど誰が想像ができたでしょうか。神様が下さったこの家族、そして



て出会わせて下さったよき友に、只々感謝するばかりです。

こんな私の家族が、来年には枝を増し、新しい家族が生まれる予定です。幼い時から慈しんで育ててきた娘に、人生を共にしていきたい人が出来たというのです。お相手は神学生。これも神さまの不思議なお導き

先月七(二二)、太陽が月によって全く隠れてしまふ皆既日食があった。私達にとって、いや全ての生き物にとって、光は無くしてはならないものだ。もし、太陽から光が来なくなったら遅かれ、早かれ人間を含めて全生物は絶滅するだろう。太陽は命の源のようにさえ思える。その太陽が隠れる「日食」は何を現しているのだろうか。これは滅び、破滅を予感さすものだ。

ヒンズー教の神話では、日食はラーフとケトウという魔物が太陽をのみ込むことによつて起きる現象と考えられている。日食にまつわる迷信が存在するのは、インドだけではない。中国でも古代から、日食は皇帝の死など不吉な出来事の予兆とされてきた。人々が永遠

とかが、最も確実だと思つてゐる太陽の光さえ失われ、やがて全くの闇が来ると聖書は記している。イエスの十字架の時は昼の一二時頃全地が暗くなり、それが三時まで続いた。真昼だというのに、太陽は光を失ひ三時間も暗闇が続いた(ルカ二三：四四)。これは明らかに日食とは違ふ。今回の皆既日食でも一番長いところで六分あまり、それでも不気味な恐怖を覚える。イエスを十字架に付けた人々はどれほど恐怖に包まれたことだろう。直接、十字架に付けたローマの百人隊長や見張りをしてきた人々は暗闇の中で神に向かつて叫ばれるイエスの姿を見て、非常に恐れ「本当に、この人は神の子であった」と言った(マ

永遠の光

紀南教会牧師 上山 耕司

タイ二七：五四)。
聖書はやがて完全に太陽が光を失ひ、暗くなる時が来ることを告げている。その

言われている。「その苦難の日々の後、たちまち太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。」それは滅びの日、破滅の日であると同時に救いの日である。その時、主の名を呼び求める者は皆、救われる、とあるとおりだ。これはこれから起こることだが、すでにイエス・キリストは二千年前に真の光として、この世に來られた。聖なる光り輝く神が罪人の姿となり、しかも死刑囚として十字架について死なれた。それは私達を罪の闇から、命の光へ移し、光の子とするためであった。「その光は、まことの光で、世に來て全ての人を照らすのである。」イエスは光としてこの世に來て、私達の一

なのでしよう。戸惑う私に、「祈つて応援してほしい!」と言う娘。神さまが必ずよきにして下さると思いながらも、どこかで無用の心配をし、委ねきつていない自分。神さま、ごめんなさい! 私なんかより、ずっとずっとしっかりと考えている娘。たとえ、色々な試練があつたとしても、神さまが必ずよきにして下さらないはずがないと思ひ直す私。

結婚当時は、多少経済的な大変さはあつたとしても、健康で働ける体を下さるよきに、神さまにお願ひしていた私でした。心配をよそに、いつも不思議な形で備えをして下さった神さま。勿論、元気な体もくださいました。三〇年が過ぎようとして今、私は又こんなお願いをしていきます。神さまのところに帰る日迄、平安な心で毎日が過ごせますように! こんな自己中心な私に、多くを恵んで下さった神さまへの感謝を忘れないように!そして、周りの人を大切にしていけますように!



鼓

合唱から

キリスト者へ?

私が合唱と出会つたのは、小学校の四年生の時です。そして、高校の時にまた合唱に戻り三年間みっちり合唱漬けになりました。この三年間で発声の基礎や合唱に必要なとされる諸々の事柄、また合唱の難しさや楽しさを教えていただきました。

卒業し、大学進学後は大学の男性合唱団でまた合唱を再開することになりました。進学した大学は工学系の単科大学でしたから、その当時(今から二三年程前)は圧倒的に男子生徒が多く、合唱やるなら当然男性合唱だろうという雰囲気でした。また、合唱そのものについても硬派の合唱団で練習は厳しく、先輩方の技術レベルは高校で合唱を経験していた私にとつても凄いと感心させられる高いものを持つておられました。この学生時代に高度な男性合唱の響きに魅せられた私は、社会人男性合唱団で更に素晴らしい合唱音楽に触れ、高校時代にこれが合唱だと思つていたのは広い広い世界のほんの一角に過ぎないことに気付くことになりました。

当時歌つていた曲の中にルネサンス期の宗教曲が多くありました。丁度その頃、名古屋の五反城教会の教会堂でイギリスの男性合唱アンサンブル、「プロ・カン

テイオーネ・アンティカ」の演奏会が開かれました。彼らはルネサンス期の宗教曲の演奏を得意としていたとき、なぜこれほどの演奏ができるのかという驚きと感動で圧倒されたことを今でもハッキリと覚えています。これも歌つことのテクニクの優劣(彼らはプロ中のプロですから優れているのは当然なのですが)を超えたもつと深いところで歌っているからではないだろうか?だとするならば多分彼らはキリスト者だろう(ここは当時の私の勝手な想像なのですが)からキリスト者ではない私達には到底最初からできる演奏に違ひがあるのではないだろうか?というものでした。言い方を換えれば宗教曲をより素晴らしく演奏できるようになりたければ自分もキリスト者になる必要があるのではないか。宗教曲はキリスト者のための曲なのだから当然の話ではないかというのが二十歳過ぎの私の論法でした。

それから二十年程後はキリスト者として求道を始めることとなつたのですが合唱好きの私の中に二十歳の時のあの論法がずっと引っかかっていたのも否定できないのです。

何時も最終チェックをして下さる兄弟に、今号もこ苦労をかけた。二四号は一月二九日の予定。

輝